



Rio

<http://yahagigawa.jp>

豊田市矢作川研究所 月報

- ◆あけましておめでとうございます
- ◆神奈川環境科学センターの環境学習事業
- ◆川っ娘の育成を目指して
- ◆ふるさと再生を願う環境学習
- ◆第2回 天然アユを増やすと決めた漁協のシンポジウム
- ◆第13回 豊田市矢作川研究所シンポジウム開催のご案内
- ◆「矢作川学校ミニシンポ」のお知らせ
- ◆表紙の写真

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F

TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

e-mail yahagi@yahagigawa.jp

2007.12
2008.1 No.115

あけましておめでとうございます

水谷 清

新春のお慶びを申し上げます。新年を迎えなぜか、
昨年（こぞ）のことが過ぎります。

去年は、ドラゴンズの53年ぶりの日本一で燃えま
した。奇しくも、53年前日本一を中日球場で父親に
連れられ観戦した一人です。それ以来のドラとの付き
合いです。何にもまして、53年前、そこに居合わせ
たことに驚きと興奮を隠しきれないし、^{ひいき}鼻負の勝利に
酔いしれる身の平凡さに幸せを噛み締めています。

8月の始め、念願かなって、憧れの槍（北アルプス・
槍ヶ岳3,180m）の山頂に立つことができました。テ
ント場より空が白む前に歩き始めます。頭上は、満天
の星、その中に光のオブジェ・天の川そして流れ
星……しばらく星とのランデブー。時空を超え
る、そんな言葉が過ぎりました。

頂上の穂先は鋭く天を刺している、その姿は古代遺
跡から出土した鏃を連想させます。「天と地」の間で
360度の展望は遮るものは何もなく、自然の深さ、大
きさ、美しさをとことん味わいました。帰路、お花畑
がバテにバテた体を癒してくれます。白いハクサンイ
チゲ、黄色いシナノキンバイの群、その中で一輪のク
ロユリ。いくつかのお花畑はギャラリーのようで、自
然が描いた一幅の絵はこの夏のささやかなプレゼント
でした。上高地から槍沢の最もポピュラーなコースで
2泊3日の山行きです。私には何にも変えがたい感激
的な一齣（こま）です。

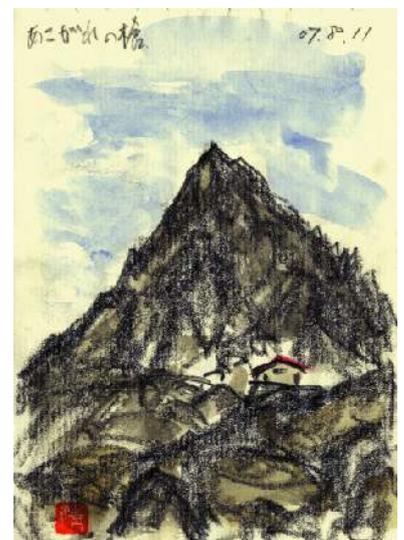
「感激しないものには 精神の緊張が無い 感激が
傑作を作る 自ら感激して初めて 人を感激せしめる
ことができる」私の好きな魯山人の言葉です。

矢作川研究所では、「矢作川学校」を開いています。
子どもたちに川の自然と川の生き物に直に触れ、川と
遊ぶ楽しさを感じてほしい。そんな想いから始めてい
ます。また、市民のための川の自然教室や川の愛護活
動の支援も活動の一つです。川の自然とのふれあい・
体験・学習をコンセプトとする「(仮称)水辺ふれあ
いプラザ」整備の構想をたてています。川での魚採り
や生物の観察・飼育といった体験を通し川の自然につ
いてやさしい心を育み、殊に、生物の生命の躍動感や
自然の神秘に共感した子どもたちが大人と一緒に、生
命の尊さや自然環境の大切さを知り、学んでいくため
の川の環境学習の拠点づくりです。

子どもたちに「自然の脅威と感動」を伝えていかな
ければならない。

それには市民、環
境保護団体、漁業
協同組合、川の管
理者等の皆さんと
の堅固なパートナ
ーシップが不可欠
であり、いつも皆
さんと共に考え歩
んでいきたいと願
っています。

本年もよろしく
お願いいたします。



(みづたに きよし、豊田市矢作川研究所 所長)

神奈川県環境科学センターの環境学習事業

— 市民による環境保全活動の支援 —

野崎 隆夫

神奈川県環境科学センターでは、平成3年度に環境学習施設を作り本格的に環境学習事業を開始しました。当初は、ジオラマやパソコンゲームで子どもたちに環境問題を学んでもらう展示コーナーの運営と、地域で環境学習や環境保全活動を率先して行う市民を養成するための講座の開催が主体でした。その後、県内にはさまざまな環境活動を実践する市民が増えたこともあり、その方たちの支援をすることも一つの柱にしました。当センターは良好な環境の確保のために、環境調査や環境保全のための試験研究に長年取り組んできましたので、その知識と技術は、身近な川や里山などの環境を守るために活動している市民の役にも立つと考えたからです。

そこで、平成13年度の施設再整備の際、単に講座や教室を開催するだけではなく、市民が主体的に使用できる実習室を整備しました。そこには水質や大気の分析をするための実験機器や生物を観察するための顕微鏡などを備え、希望者に利用していただくとともに、必要に応じて化学分析や生物同定の指導も行っています。

再整備後、総合学習や自由研究などでの利用とともに、身近な河川の復活や里山の保全をしたいという具体的な対象を持った市民グループの利用も増えていきます。そのような市民から調査方法などについて相談があると、まずは一緒に現地に出向き、何をどのように調査したらよいかから一緒に考えます。一言に保全

活動といっても、対象を取り巻く背景はそれぞれ異なりますし、活動に費やせる時間や人材はグループごとに違いますので、一般化できる方法などありませんが、明確な目的と活動に対する情熱を持った方たちと最善の方法を一緒に考えることができるのは、楽しく貴重な体験です。

今、実習室では、汚染が進んだ河川をなんとか元の姿に復活させようというグループや、荒れた里山を手入れし多様な生物の息を夢見るグループが、河川水や生物を持ち込み、慣れない手でピーカーを振り、顕微鏡で生物を観察しています。調査し観察した生物などを通して生態系の不思議を発見する。苦労して得たデータを基にその環境について考える。まさに、環境保全活動を通して環境を学ぶ場になっていると思います。

さらに、ほとんどのグループは、自分たちの活動の場を子どもたちに対する環境教育の場としても利用しています。自ら汗を流して活動する大人たちが、自分たちの手や目で得た科学的な知識を通して環境の大切さを教える姿は、子どもたちに訴える力も大きいものと思います。今後も市民が主体的に考え行動する環境保全活動を、技術的に支援する場を広げていきたいと考えています。

(のざき たかお、神奈川県環境科学センター
情報交流部 環境学習担当 専門研究員)



都市河川で魚類調査 (酒井道子氏撮影)



実習室で水質分析

川っ娘の育成を目指して ～人文社会学系の大学における河川実習～

野崎 健太郎

表題の「川っ娘」は「かわっこ」と読んで下さい。私の環境教育の実践は「川ガキ」ならぬ「川っ娘」を育成することなのです。それはなかなかおもしろいことでもあります。

私は、この4月から学内の配置転換で新設の教育学部に異動しましたが、それまでの5年間は、人間関係学部人間関係学科という社会学、教育学が主流の学科に勤務していました。そこでの私の任務は、いわゆる「文系」の学生に環境学を教えることでした。

環境学は、最終的には環境配慮行動ができる人を育成することが目標です。そのためには、“体験”が欠かせないことを多くの方が指摘され、実践しておられます。私もその意見には全面的に賛成で、着任1年目から教室を飛び出し、体験することを実践してきました。今回紹介する授業はその1つで、合宿形式で川の環境を存分に体験します。

場所は木曽川の上流域、木曽町（旧木曽福島町）中心部近くです。ここに位置する京都大学木曽生物学研究所が実習の基地になります（写真1）。格安で宿泊でき、京都大学で最もおいしい食事が3食提供されます（3泊4日で総額7,500円程度）。私が勤務する大学は名古屋市および愛知県尾張地方出身の学生が大部分です。その多くが、木曽川の水を飲んで成長してきています。講義でそのことに触れ、



写真1



写真2



写真3



写真4

ぜひ上流域を見てみようかと誘うわけではあります。

実習1日目は、まず沢を登ります。ヘルメットを被り、ヤブこぎしながら上流へと向かいます。小さな淵にはまったり、滑るたびに黄色い声が響き渡り静かな山間が賑やかになります（写真2）。2日目は、安全に十分配慮し、支流の黒川で観測を行い“川”というものを存分に“体感”してもらいます（写真3）。中には橋の上から飛び込む学生もいて大はしゃぎです。3日目は、木曽川本流に出掛け、大きな川の流れを感じてもらいます（写真4）。そして、流れの強さを味わい、川で人が溺れる理由を考えてもらうのです。

この実習を終えるころ、全員が「キモかった」川虫に触れるようになり、その成長を感じます。みな立派な「川っ娘」です。今、理系大学でも野外実習は縮小の一途です。その流れに危うさを感じます。この実習には、そういった危うさを感じている多くの同輩、後輩が有志で協力してくれています。それらの方々に深く感謝し、ますます、良き実習にしたいと考える毎日です。今後は、教育学部なので「川先生」の育成に挑戦したいと思っています。

（のざき けんたろう、梶山女子学園大学 教育学部／人間関係学部 准教授）

ふるさと再生を願う環境学習

林 宗弘

本校は旧豊田市の東部「石野地区」にある全校児童39名の小規模校である。ササユリ保護活動やビオトープ学習を教育課程の中心にすえ、様々な環境学習に取り組んでいる。ここでは、里山を整備する活動が発展した「白鷺の道」造りの実践を紹介する（写真1）。



写真1 山道造り

1. 里山の整備と炭焼き活動

昨年度、市のチャレンジ&ドリーム事業の一環として、本格的な炭窯を建造した。これは、従来から使っていたドラム缶の炭窯が老朽化したという理由もあるが、かつてのように薪炭材として間伐したり、竹を切り出したりすることで、荒れた里山を整備しようという願いから建造したのである。

この1年間で12回も炭焼きを行ったことで、学校周辺の竹藪をかなり切り開くことができた。木炭はバーベキュー用として、竹炭は脱臭、消臭、水の浄化など、校区住民に広く利用されている。また、川の浄化に役立てようと、学校の前を流れる一の瀬川に投入すると共に、市街地を流れる加茂川や遠く岐阜県大垣市でも使われるようになった。



藤ゾルを見つけてターザンごっこが始まった

2. 「白鷺の道」を造ろう

里山の整備をする中で、子どもたちは、森の中にかつて木こりや参詣者が使ったと思われる山道跡があることに気付いた。聞き取り調査をしてみると、両親の世代は誰も知らず、高齢の祖父母が子ども時代に通った道であることが分かってきた。

学校の裏山には、名勝「鷹見岩」という巨岩があるが、それに似た岩が山道沿いにいくつもあり、小さな祠跡も見付かった。それはかつて里人たちが、毘沙門天や金比羅様を祀った祈りの場であり、子どもたちの安全と健康を祈って団子を振舞う「お団子祭り」という憩いの場でもあった。子どもたちは、自分たちのふるさとにもそんな文化があったことに驚き、里山の整備に新たな目標を見出した。

さらに、子どもたちは古老から「鷺岩」という、岩肌に鷺の模様が浮き出た岩があることを聞き、山の中を探し回って発見した（写真2）。すっかり山道に詳しくなった子どもたちは、巨岩を巡り、鷺岩に至る「白鷺の道」を造る計画を立て実践中である。

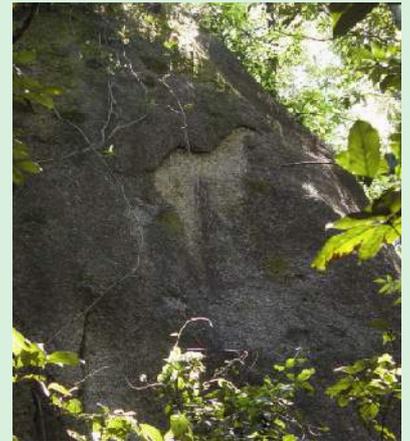


写真2 鷺岩

3. 環境学習の進化

ふるさとの史跡や古道の発掘は、郷土史の研究分野である。しかし、里山の環境整備は郷土の文化や伝統と一体のものであり、里山を貫く山道も文化、経済、生活と切り離して考えられるものではない。その意味では、単純な学問領域で括られないものがある。そのことを、この実践で子どもたちから教わったような気がする。

荒れた森を整備する目的で始まった炭焼き活動が、子どもたちの発想の広がりによって、ふるさとの歴史と文化を見直す学習に広がった。環境学習が、進化・発展した瞬間であるように思う。

（はやし むねひろ、豊田市立上鷹見小学校 教諭）

第2回 天然アユを増やすと決めた漁協のシンポジウム ～2007年 矢作川大会 開催報告～

去る11月10、11日に豊田市能楽堂・豊田産業文化センターで『天然アユを増やすと決めた漁協のシンポジウム』が開催された。この少し変わった名のシンポジウムは、天然アユ保全ネットワーク※1が日本の大切な資源である天然アユを増やすために企画したもので、まだ具体的な手法が確立されていないこの取り組みについて、全国の漁協や釣り人、研究者、行政が集い、問題点を討議し情報を交換するために3カ年に渡って開催することが決っている。今年の矢作川大会には天然アユを増やす努力をされている漁協、行政の方々、たくさんのアユを釣りたいという釣り人など、北は秋田県から南は大分県まで約420名が集まった。



1日目のシンポジウムでは「天然アユ資源を保全するための種苗放流」について福山大学の谷口教授が講演、全国で川を調査している高橋勇夫氏からアユを増やすための技術解説、事例報告として矢作川研究所と矢作川天然アユ調査会ひとくるの取り組みや兵庫県猪名川上流の一庫ダムでの環境対策、また、釣り人からの意見としてアユ釣り名人の大西満氏から「その川を知らない人が訪れても案内してくれる人がいる川、女性優先の釣り場のある川があるといい」と漁協へのお願いがあった。その後のディスカッションでは、「天然アユ復活と河川利用の調整」をテーマに発起人の3組合長と猪名川漁協鈴木専務理事、地元の豊田土地改良区三浦理事長により、限りある川の水をいかに調整しながら利用していくかが討議された。その中で、矢作川では



永年争ってきた土地改良区と漁協がやっとお互いを認め合う組織となり、協調路線を歩み始めたことが話し合われたが、時間の都合で尻切れの感があり残念だった。

2日目は、3つの会場に別れて分科会が行われ、前日の大懇親会にもかかわらず、どの会場も多くの意見や質問があり非常に熱心な討論が繰り広げられた。今回のシンポジウムでは産卵期の乱獲規制や産卵場の造成、遡上・降下期の水量調整など天然アユを増やすための環境整備を進めていくことが重要であり、その具体策が話し合われた。さらに、整備を進めていく上で、漁協だけでなく、市民や関係機関など流域全体を巻き込んだ流域全体での取り組みが必要不可欠であることが強調された。

開催にあたり、天然アユ保全ネットワーク矢作川実行委員会※2が設立され、事前の準備や当日の運営等の大役を果たした。この貴重な体験と自信が今後のより良い矢作川に向けた取り組みに活かされていくと思う。

(天然アユ保全ネットワーク矢作川実行委員会事務局)

※1 発起人：天竜川漁協組合長 秋山雄司、物部川漁協組合長 岩神篤彦、矢作川漁協組合長 新見幾男、たかはし河川生物調査事務所（高知市）代表 高橋勇夫

※2 構成団体：矢作川漁協、岡崎市漁協、男川漁協、巴川漁協、名倉川漁協、岐阜県矢作川漁協、根羽川漁協、平谷村漁協、矢作川天然アユ調査会、豊田市矢作川研究所

▶ 第13回 豊田市矢作川研究所シンポジウム開催のご案内

日 時：平成20年1月31日(木) 13:30～16:45
場 所：豊田産業文化センター 小ホール
テーマ：川に生かされ、川を生かすまちづくり

豊田のまちなかでは矢作川に加え、枝下用水、根川用水といった水路に沿って自然緑地が点在しています。街



枝下緑道(豊田市平芝町)

の水と緑は都市住民が身近に親しむことのできる自然であり、都市環境の緩和や住民のストレス軽減、防災などの多面的な役割を兼ね備えています。このシンポジウムでは、豊田のまちなかの自然の調査結果をご紹介しますとともにその存在意義を再認識し、川の自然をまちに引き込む工夫を考え、住む人の心に潤いを与え、訪れた人の心を癒す、自然の豊かなまちづくりを進めるにはどうしていけばいいか考えます。

◇基調講演『川と自然を生かしたまちづくり』

大和田道雄(愛知教育大学)

◇基調報告『豊田のまちなかの生き物たち』

洲崎燈子、間野隆裕(豊田市矢作川研究所)

◇パネルディスカッション

コーディネーター 古川彰(関西学院大学)

パネラー 大和田道雄、羽根博之(豊田市都市計画課)
成瀬順次(児ノ口公園愛護会)、洲崎燈子

* 申込不要、参加費は無料です(シンポジウム後のセッションは有料)。

▶ 「矢作川学校ミニシンポ」のお知らせ

矢作川学校では、次世代の研究者の育成を図る目的で中高生、大学生と地域の研究者との交流を図り、矢作川の自然科学や歴史文化について対話を深める場となるミニシンポジウムを開催しています。今年度のミニシンポジウムは下の要領で開催します。

皆さまのご参加をお待ちしています(聴講のみの参加は申し込み不要)。

なお、矢作川学校事務局では、今年度のミニシンポジウムの発表を募集しています。1発表は約15分(質疑応答含む)を予定しています。発表ご希望の学生(生徒)さんがおられましたら、氏名、所属、タイトル、連絡先を1月末までに事務局へお知らせください。

日 時：平成20年3月2日(日) 13:00～

場 所：豊田中央図書館(参考館)7階会議室

発表内容：矢作川の自然・歴史文化に関する研究

対 象 者：中高生、大学生、大学院生、矢作川に関心のある一般人

参 加 費：無 料

事 務 局：豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F

豊田市矢作川研究所内(担当：内田・高橋)

電話：0565-34-6860 FAX：0565-34-6028

e-mail：uchida@yahagigawa.jp

表紙の写真

久澄橋より
矢作川上流
側を望む

2005年12月19日
豊田市森町
(洲崎燈子 撮影)



後記

明けましておめでとうございます。今回は様々な立場で環境教育を実践している方々に原稿をお書き頂きました。現在、中央教育審議会では学習指導要領の改訂を行っていますが、環境教育に力を注いでいる「総合的な学習」の時間は削減される方向のようです。今後、各学校でこれまで培われてきた環境教育のノウハウや知見が、とだえることなく継承され、そして発展していくことを願います。(白)